

宮崎県総合計画審議会第1回専門部会

(人づくり部会)

会議録

日時 令和7年12月16日(火)

9:50~12:00

場所 宮崎県防災庁舎41号室

○事務局

ただいまから、宮崎県総合計画審議会第1回人づくり部会を開催いたします。

まずは資料の御確認をお願いいたします。本日お配りしている資料は次第にある配付資料の通り、次第、専門部会委員名簿、配席図、「【人づくり】本日の論点」を示した資料を配布しております。資料に不足がありましたらお知らせください。

続きまして、委員紹介に移ります。御出席の委員の御紹介につきましては、時間の都合上、お手元の専門部会名簿及び配席図をもちまして、御紹介に代えさせていただきます。

それでは本日の議事に入らせていただきます。

これからの進行は金丸部会長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○金丸部会長

部会長を仰せつかりました、金丸でございます。

本日の会議を円滑に進行できますよう、皆様の御協力をよろしくお願いいたします。

まず本日の会議録署名委員を指名させていただきます。本日御出席いただいております委員・専門委員の中から、宮本委員と木場専門委員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

次に副部会長についてです。規定によりまして、部会長に欠席等があった場合に職務を代理する副部会長は、部会長の私から指名することとなっております。

副部会長につきましては、川崎委員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、議事に入ります。

本日の議題はお手元の次第にありますとおり、長期ビジョンの改定に向けた主な論点として、「次世代の育成」と「あらゆる人が活躍できる多様性に富んだ社会づくり」について議論することとなっております。

まずは事務局の方から資料の説明をお願いいたします。

○事務局

総合政策課の藤村でございます。私から説明させていただきます。

それでは、お手元の「【人づくり】本日の論点」と書かれた資料を御覧ください。

今、部会長からもありましたとおり本日は大きく2つの論点、1つ目が「次世代の育成」、2つ目が「あらゆる人が活躍できる多様性に富んだ社会づくり」という論点について御議論いただくこととしております。

こちらにつきまして少し説明させていただきます。2ページを御覧ください。

ここでお示ししておりますが、「くらし・地域社会の担い手」、それから「産業・経済の担い手」と書いております。今回のこの審議会の部会は、「人づくり部会」「くらしづくり部会」「産業づくり部会」という3つの部会になっておりますが、くらし・産業のベースとなるものが人であると考えております。真ん中の辺りで示しておりますが、人が今後、減っていくということが避けられない状況の中で、今後どうしていくかというところで、大きく2つの論点というふうに考えております。

1つ目が、手をつないだ小さい子どもの絵が描いてありますが、次世代をどのように育成していくかというところです。

そしてもう1つが、これまで社会の中であまり活躍の機会がなかったような方も含めて、多くの方、多様な方にどう活躍していただくかというところです。もう1つ、AIということも書いてあるのですが、今回は「人づくり」ということですのでこちらについては、除くというふうに考えております。

それでは改めまして3ページを御覧ください。ここからは「次世代の育成」という1つ目の論点について、参考となる部分について御説明いたします。赤い枠で囲っておりますが、こちら「次世代の育成」に関連した現状や課題についてお示ししているところです。先ほど全体の中でもありましたけれども、出生数や合計特殊出生率が低下しており、また、変化が激しく不確実性の増す現代社会において、子どもたち自身の多様化ということも言われております。こういった中で、社会全体で子育てをするという機運を盛り上げる、また子どもたち自身も、地域を担う一員になるという意識を高めるということが重要であると考えております。

では4ページから、少し資料を用いて御説明いたします。4ページは、出産や子育てに対する意識の調査結果です。全国的な調査、他国も比較した調査となっておりますが、日本はこどもを産み育てやすい国だと思うか」という問いに対して「そう思う」と回答した割合が低く、近年その傾向が低下しているという状況にあります。

続いて5ページを御覧ください。こちらは本県の状況を示しております。全く同じ問いではありませんが、同じような「本県は、安心して子どもを生むことができ、子育てを楽しいと感じられる県だと思いますか」という問いに対しましては、8割近くの方が、「思う」、「ある程度思う」と回答しております。一方で、「子育てに関して不安感や負担感などを感じますか」という問いに対しても、約4割の方が「非常に感じる」、「何となく感じる」と回答しているところです。

続きまして、6ページを御覧ください。ここからは、国の取組や施策について少し御紹介いたします。まず6ページは、国の「こども未来戦略」を紹介するために作られたパンフレットですが、生まれる前から大学卒業まで、ライフステージに応じて様々な支援が行われております。

そして、7ページを御覧ください。こちらもこども家庭庁のリーフレットからの抜粋ですが、「こどもまんなかアクション」ということで、子育て世帯や、または国や行

政だけではなく、社会全体で、子どもや子育て中の方々を応援し、社会全体の意識改革を後押しするというような取組になっております。

続いて8ページを御覧ください。こちらは宮崎県の取り組んでいる施策についてまとめたものになっております。出会いから結婚、妊娠、出産、そして子育て、就学前、就学後というふうに左から右に施策が紹介されておりますが、本日は特にこの右側の子育ての部分について、御議論いただければと考えております。この中で特に赤い枠で囲んでおりますけれども、今年度から「第2子保育料負担軽減事業」や「放課後児童クラブ待機児童解消加速化事業」といったものに取り組んでおります。

続いて、9ページから、我が国と諸外国の子どもと若者の意識に関する調査について、御紹介いたします。まず左側ですけれども、「私は、自分自身に満足している」という問いに対して、日本は他国と比べて、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」という回答の割合が低い傾向があります。また左下、過去30日の間で、「自分の人生には方向性や意味があると感じた」という問いで、左から「一度もない」、あるいは「一度か二度」という回答が、日本は他国と比べて、高くなっており、その頻度が低いという傾向が見てとれます。右側に関しましては、社会との関わりについての問いで、右上が「将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したい」という問いに対して、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」という回答が、やはり日本が低い傾向にあり、右下の「社会に貢献できる要素があると感じた」という問いに対して「一度もない」、「一度か二度」という回答が他国と比べて、こちらも頻度が低いということが分かります。

続いて10ページが「みやぎきの教育に関する調査」の結果です。左上が「自分にはよいところがあると思う」という自己肯定感に関する問いですが、令和元年度と令和6年度を比較すると、少し高まっているという状況があり、全体で約8割程度の児童生徒が、ある程度も含めると「自分にはよいところがある」と考えていることが分かります。右上、「社会の役に立ちたいと思う」という問いに対しても、「とてもあてはまる」、「ある程度あてはまる」を合わせると、9割を超えております。一方で左下、「ふるさとへ貢献したいと考えている」という問いになりますと、特に中学生、高校生で「とてもあてはまる」、「ある程度あてはまる」を合わせた割合というのが、約5割程度になっていることが分かります。

続きまして、11ページです。こちらは、コミュニティ・スクール（学校運営協議会）の紹介のスライドになっております。左側は文部科学省の資料ですが、学校のことを学校だけでやるのではなく、地域と協働して行うという地域学校協働活動ということで、学校の中でも地域の方に入っただいて、学校運営協議会という形で行うということになっております。県内でもこういった取組が進んでおり、右側、令和6年度に文部科学大臣表彰を受けた宮崎南高校の資料ですが、基本コンセプトのところにありますように、地域の教育資源を幅広く活用する、持続的な社会の創り手として

の視点を持った次世代リーダーを育てることが示されております。

続いて12ページです。こちらは、文部科学省が学習指導要領の改訂に向け、中央教育審議会に諮問した資料ですが、「子どもたちを取り巻くこれからの社会の状況」を整理しております。こちらにありますように、変化の激しい時代とか、マルチステージの人生といったところに転換していくということが言われており、こういった社会の中で、次世代の子どもたちをどのように育てていくかといったところが、議論のポイントになるかなと考えております。

13ページを御覧ください。ここまでの資料も踏まえ、本日皆様に御議論いただきたいこととして、1つ目の「次世代の育成」の3つ目の点の赤い囲みのところに書いております。「本県の未来を支える次世代を社会全体で育てるために大切なことは何か。また、子どもたちが自分に自信を持ち、地域を担う人材へと成長できるようにするためには何が必要か。」について御議論いただければと考えております。

続いて14ページを御覧ください。こちらは、2つ目の論点「あらゆる人が活躍できる多様性に富んだ社会づくり」についての現状や課題についてです。先ほどからも申しておりますとおり、人口減少において、社会のあらゆる場面で担い手が不足し、より幅広い人たちに役割を担ってもらう必要があると考えております。こういった共生社会の実現を目指すという中で、誰もが活躍できる環境をどのようにつくっていくかということが重要になってくると考えております。

15ページを御覧ください。先ほど全体の中でもございましたが、日本に住む外国人の数というのは、近年急激に上昇しており、本県においても増えてきている状況にあります。こういった中で、外国人との共生に関する意識についての調査結果です。上段が全国の結果です。「外国人に対する偏見や差別の有無」について、「偏見や差別がある」と考えている人は7割近くに上っております。一方、下段の宮崎県の県民意識調査の結果を見ますと、「外国人や外国の文化・習慣などに対する偏見や差別がある」と感じている方が、「感じることが多い」、「ときどき感じることもある」を合わせましても、1割強というふうになっております。こちらはあくまで意識ですので、実際にそういった偏見や差別があるかどうかということとはまた少し違う問題なのかもしれませんが、全国と宮崎でこういった結果の違いが出ております。

このように、日本における外国人の数が増えてきているという状況の中、16ページのとおり国においても方針を示しております。外国人との共生について、3つのビジョンというところで、真ん中の段にありますが、安全・安心な社会、多様性に富んだ活力ある社会、個人の尊厳と人権を尊重した社会、こういった共生社会を目指していくというところを国としても示しているところです。それでは、外国人との共生に向けた事例として、17ページを御覧ください。

こちらは、滋賀県草津市の事例ですが、地域の消防団に外国籍の方に入っていたかどうかというところで、「機能別消防団」というものを発足させたという取組でございま

す。ポイントとしては、一番上の囲みの中に赤で書いてありますが、「支援される側」から「支援する側」へ回っていただくというところで、外国人の中でも特に語学力に優れているとか、日本の生活への理解が深いという方に入っていただくことで、災害時などに「支援される側」というだけではなく「支援する側」にもなっていていただくという取組でございます。

続いて18ページを御覧ください。こちらは、県内延岡市の事例ですが、市内で働くミャンマー出身の方が増加しているという状況です。こちらについては、10年以上前からミャンマーとの民間レベルでの交流が続いており、それがもとで長期的な関係性を築いているということで、近年延岡に来るミャンマー出身の方が増えているという状況です。右側の下の方にもありますけれども、産学官連携による交流が「延岡モデル」として呼ばれるという状況になっております。

続いて19ページを御覧ください。ここからは、高齢者、障がい者の状況についてです。19ページは、健康寿命というところで、日常生活が制限されることなく生活できる期間というところを健康寿命と言いますが、下にありますように、宮崎県男性は令和4年直近の数字で72.29歳、女性が76.13歳となっております。青色の方の平均寿命との差をなるべく小さくしていくということが目標となっております。

続いて20ページを御覧ください、こちらは高齢者雇用の状況です。左上、図4のとおり、全国で930万人の65歳以上の方が就業しています。右側の図6で見ていただくと、赤い折れ線グラフが65歳以上全体ですが、65歳以上の方の4分の1の方が就業しており、紫色、一番下の75歳以上の方でも12%の方が就業しているということが分かります。下の図5で見ていただくと、働いている方に占める65歳以上の方が13.7%と、およそ7人に1人が65歳以上であるということが分かります。

続いて、21ページを御覧ください。障がい者雇用の状況です。こちらも右端、見ていただきますと、直近の令和6年で、67万7000人の方が働いております。真ん中上の方に、民間企業の雇用状況という囲みがありますけれども、宮崎県は実雇用率、法定雇用率達成企業の割合、いずれも全国の数値を上回っている状況であります。

続きまして、22ページを御覧ください。ここからは、多様な主体が活躍できるあり方のイメージということで、2つお示ししております。1つ目が、国が地方創生の観点から示しております、全世代・全員活躍型の「生涯活躍のまち」という施策です。これは、年齢や障がいの有無などを問わず、誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりを推進しているものです。右側の写真4枚ありますが、こちらにありますように子育て世代、世代を問わず活躍できる、多世代あるいは地域の内外での交流を促進していくというような取組になっております。

続いて23ページを御覧ください。こちらは国の資料ではないのですが、国の有識者会議で民間の有識者から示されていた資料になります。平成26年の時点で、「CCR C」という取組が研究されておりますが、こちら最初の段階では、高齢者中心の話だ

ったんですが、今回示されております「CCRC2.0」は、リタイアメントのRがレイションに変更されております。単に高齢者だけの話ではなく、共助とつながりのある世代コミュニティというところで、多くの世代、あるいは様々な立場の人達がつながりを持ってコミュニティを築いていくといったところが描かれているところです。

それでは24ページを御覧ください。これまでの資料等も踏まえまして、本日御議論いただきたい論点の2つ目です。一番下に赤い囲みで囲んでおりますが、「あらゆる人がお互いに尊重し合い、多様な主体が自分の個性や能力を発揮しながら活躍できる社会をつくるためには、どうすれば良いか。」ということについて、皆さんに御議論いただければと思います。私からの説明は以上です。

○金丸部会長

ありがとうございました。それでは、まず論点1であります「次世代の育成」から、皆様方の御意見を伺いたいと思います。どなたからでも結構ですので、御意見がある方はお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

改めて今、説明がありました内容を再確認し実感していただいた部分もあったのではないかと思います。御意見はいかがでしょうか。

○伊豆元専門委員

伊豆元と申します。どうぞよろしくお願いたします。

この資料を最初送っていただいた時に、率直な感想として嬉しく思いました。本当に私達が今困っていることや自分達としての課題とか、こういうことを取り組まないといけないなって感じていることを、ちゃんと県が分かってくださっていて、それを論点として、またこれからどういうふうにやっていけばいいかというのを、話し合っていきましょうという、本当になんか希望が見えてきたというか、考えていけないと思っていたので、本当にありがとうございます。

まずアンケートの中で、色々出てきている中で、子どものことがちょっと出てくるのですけれど、私も子どもに関する施設にいるのですけれど、子どもの多様化というよりか、家庭の多様化、ここをどう支えていくかということも大きな論点だと思っております。人口減少が進んでいる中で、アンケートの中に、スウェーデンのアンケートの結果が出ております。実は17年ほど前にスウェーデンへ行かせていただいて、それから何年間か研究をさせていただいております。そして今、日本のこども家庭庁が進めている中で、スウェーデンを含む北欧の取組というのが、日本の保育、教育の1つの大きな方向性となっておりますので、ぜひアンケートの結果を踏まえて、生かしていただけたらと思います。

私、その中でショックを受けたのが、私も中学校の教員として20年近く勤めておりました。その後、幼稚園、こども園になっているのですけれど、環境がかなり違いま

す。保育の質、家庭も喜ぶ、子どもも喜ぶ、社会が喜ぶ。スウェーデンが人口減少から復活してきた中で、大きく保育の質、教育の質というのが改めて、もっともっと勉強しないといけないなと思う環境がありましたので、ここも論点に受け入れていただけるとありがたいなと。

当然、子育ての支援もあるのですが、質というところで、その質というのが人材の質もありますけど、環境の質とかそこも見ただけならありがたいなと思っております。よろしく願いいたします。

○金丸部会長

ありがとうございました。更に質問で恐縮ですが、スウェーデンの話を紹介いただいた中で、少し具体的に教えていただけますでしょうか。

○伊豆元専門委員

まず保育者が子どもに教えるのではなく、子どもの意見を聞く。子どものやりたいことを自己選択、自己責任、民主主義。向こうのデモクラシー、自分たちは民主主義を教えているのだ。子どもの実践を教えているのだ、ということがどこの園に行っても、大きい園でも小さい園でも、若い保育者でも、ベテランの方でも言われていました。子どもに自らやりたいこと、それを選択することによって責任感をもって、色んな相手が、創造性が出てくる。そこをしっかりと聞いていくことによって、保育者が本当に指導するのではなくて寄り添って、色んなきっかけを与えているという教育のやり方、そういう点に驚きを感じました。

あと、環境ですね。やはり自然が豊かです。運動場ではなくて、園庭でした。木があり草があり、生き物がいて、それを子育て支援施設、幼児施設、病院、その中でもちゃんと遊べる。病気の子でも遊べる環境があり、色んな生き物や植物を通じて、命を感じる施設、環境がいっぱいありましたので、その違いというのを大きく感じております。

○金丸部会長

ありがとうございました。ほかに御意見がある方はいらっしゃいますか。

○二見委員

宮崎県PTA連合会会長を務めております二見と申します。よろしく願いいたします。

私自身は大学1年生と中学2年生の子どもを育てておりますが、娘を育てるに当たって、子育て支援と20年近く関わってきております。ずっと関わっているのですが、いじめ、不登校、虐待、自殺という数字が全く減っていない。子どもを取り巻く環境

をみますと、支援を一生懸命頑張っている人達も多いですし、行政も頑張っているのですが、悪化する傾向にある。こちらの資料の中にも、その日本の子どもの自己肯定感が低いというところにおいて、親がどうなのかと感じています。先ほども、家庭、保護者の説明をされたのですが、やはりその親が家庭において、前向きに本当にしつかりと、はつらつと、生き生きと子どもさんと向き合っていらっしゃれば、きっと子どもへの声かけも変わってくると思うので、子どもさんも、健やかに成長されると思うのですが、親というか、大人の余裕の無さとか、そういうのは、子どもの社会にすごく反映されているのではないかと、影響を与えているのではないかと感じています。

やっぱり家庭教育の大切さを、すごく感じているのですが、今このアプローチがすごく難しいです。というのは、例えば、このPTAという組織も、未加入や非加入がだんだん増えております。必要ないのではないかと。これはコロナ禍で、活動が止まった時期がありましたので、もう必要ないのではないかとという声もあるんですが、やはり私もPTAで学んでいくと、これは大人が学ぶための、親が親になるための学びを深めていく団体なのだと知って、やっぱり大事だなと思っております。

もう一つこの資料の中で、コミュニティ・スクールのお話がありました。やはり学校だけで子どもを育てるというのは、難しい中において、親も難しい。それなら地域の力を借りていくという部分でのコミュニティ・スクールだと思っています。ただ、これも学校評議員会のモデルで始まった頃から関わっているのですが、まだまだ第三者評価委員会の名残が抜け切れていなくて、メンバーの選出から、地域の色々な役割を持った方に入らせていただいているのですが、前向きな意見が出てこない。学校がこういう方針でいきますよ、はい頑張ってくださいという感じで終わってしまったりしていて、そもそもコミュニティ・スクールが理解できていない。そこにできればもっと若い人を入れていくとか、地域の企業を入れていくとか、その課題の困り事、本当にその学校・地域の困り事で、皆でどう解決すればいいのかという子ども達の考えを、そういう話し合いができるような、学校運営協議会になっていくと、もっと変わっていくのではないかと。私はそこにすごく期待をしているところです。やっぱり子どもを取り巻く環境が変わっている。皆が頑張っているけれど、中々良くなれないという流れに、どうしていけばいいのかと常に思っています。以上です。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○加納委員

加納と申します。今のお話を聞いて、私は働くお母さん達を抱える立場から御意見をさせていただきます。子ども達ではなくお母さん達を見ている立場で考えてみると、うちの場合は、なるべく残業のない職場を目指しているので、まずお母さん達は帰り

ます。それでも、周りの企業さんを見ていると、どうしても人手不足から残業をしないといけない、お休みを取ることができないというお母さん達が、最近増えてきているような感じがしていて、以前よりは今のほうが、働き方がまた悪くなってきているのかなというのを実感しています。余裕の無さというのは、やはり人手不足からきていますし、男性だけでなく女性にもすごく負担がかかっている。また、余裕の無い中で子ども達が窮屈な思いをして、そういう影響を受けているのかなと感じていました。

少し前に、九州であるフォーラムに出まして、企業さんや色んな方が集まっていた中に高校生が参加されていたのですが、高校生の意見というのがすごく刺さりました。大人達ばかりで話している常識や考えが、的外れだったなというのを感じ、すごくショックを受けました。学校の現場で、学びたいことや聞きたいことを聞く先生は、まず自分のクラスの先生しかいないのだけど、聞きたい先生の所に行って聞きたいけれどそれができない、あの先生に聞きに行けば、教えてくれるだろうなという先生の所に聞きに行けないという、具体的な高校生のストレスのお話を聞きました。子ども達の意見をもう少し、しっかり聞く方が早いのではないかと思いました。大人だけで話す中で、子ども達の気持ちは分からないし、意外と押しつけになっている事実もあったりして、子ども達は、本当はどうしたいのか、どういうふうに思っているのか、そこをもう少し聞いていく事で意味があって、そこから大人が学んでいくというのも大事だなと思いました。

○金丸部会長

ありがとうございました。ほかに御意見いかがでしょうか。

○川崎委員

九州医療科学大学の川崎と申します。よろしくお願いたします。

出生数とか合計特殊出生率の低下傾向ということが、家庭環境や経済的な問題であるとか、その人達の生活レベルがどうなのかということも影響があるのかなというふうに思います。その辺りを宮崎県は、全国と比較してどうなのかというのを、もう少し出していただくと、そこに対する対応の仕方があるのかなと思います。婚姻数の話は出ていますが、離婚率や母子家庭の実態というのは、やはり他の県と比べて多い状況にあるのかなというふうに出ていますので、そうすると子どもを育てるのに余裕が無いとか、経済的にも教育にお金がかけれられないということがどうしても背景になってしまうと、人づくりをしっかりとやりたいけれども、なかなか行き届かないということにつながるのかなと思うので、そういった部分の資料やデータで示した中で、検討いただけるといいのかなというふうに思いました。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○木場専門委員

宮崎県介護福祉士会の木場と申します。私は、高齢者分野の介護福祉に関わる人が多いので、高齢者分野の視点からの意見が中心になるかと思えます。

家庭環境という話が先ほどから出ていますが、高齢者に関してもやはり同じで共通する部分があるのかなと感じたところです。高齢者の方の家庭環境、住まい環境も非常に多様化しているところがあるかなと思っています。

本県において、うちの事業所の周辺のケースなどを見ても、お子様方の世代、氷河期世代とかちょっとその上ぐらいですかね。第二次ベビーブームの方々のもう少し下ぐらいの方々が、80代やそれ以上の方々を支えているという状況があると思っています。そういった方々の状況を見てみると、余裕の無さって言葉が先ほどありましたが、その下の世代の子ども達自体が少ないという状況や、子ども達が県外に出て行く。若しくは、親、要介護高齢者を支える子ども達自体が県外というケースが非常に多いので、連携をとったり情報交換をしたりする際に、非常に苦労する場面が多様に発生しているかなというふうに感じているところです。御家族の意向もそうですし、先ほどの資料にも掲げてありましたが、不動産をどうするか、処分しに子どもが戻ってきますとか、そういった話を聞くことも非常に多いなというところです。そういった部分を考えて、できるだけ地域に近い部分で課題解決だったり、地域づくりを推奨していく、考えていくことが非常に重要ではないのかなというふうに感じているところで、大きい単位で考えれば考えるほど、やはり全体的な話になってしまったり、地域コミュニティを具体的にその地域にあった形でどのように形づくるということに関しては、大きい単位だとフォーカスしにくいという部分がありますので、できるだけ小さい単位で考えていくことが大事だなというふうに思うところです。

その地域単位で考えてみると、県の話ですけれど、市町村、もう少し小さくなっていくと、市町村の中にある小さな地域単位という形になるのかなと。やはりもう少し小さくしていく必要性もあるかなと思うところです。

同じ小学校の中でも、非常に多様な子がいたり、もう少し小さい単位で課題解決だったり、地域づくりをしていく必要性があるかなというふうに思っているところです。その上で、じゃあどこがそれを担うのか、その部分を深めていくことが非常に重要じゃないかなというふうに思っているところです。

私は、高齢者分野がどうしても多いので、高齢者分野の中でいうと、地域包括支援センターや、その地域にある小規模多機能型施設、高齢者のグループホーム等が、定期的に運営推進会議を開催してしまして、そこに地域の公民館館長に来てもらって話をするという場面があります。そこで地域の話がどこまでできているかという、事

業所主体での話を中心になっているので、事業所の運営に関する話が主になっているかな、というところです。そういった部分に、こういった地域づくりという視点を上乘せできないかなというふうはこの資料を見ながら感じたところでした。

もしかしたら、子どもさんのコミュニティの中での、そういった地域づくりでの最小単位で行われているような合議体、会議体がもし存在しているのであれば、そこでもいいかなと思うのですが、そういった部分においても、できるだけ多様な人に入ってもらいながら、地域の魅力を子ども達にどう知ってもらうか、地域の中で、単身世帯で生活をしている高齢者の方をどのように支えていくか、地域の中で、例えば、一人親家庭で頑張っておられる方、障がい者の方、そして外国人の方、そういった方々を上手く取り込んでいながら、どのようにしていくのか、というところを、地域の中に現在存在している会議体、合議体にこういった機関なり、情報提供していきながら、その中で地域づくりという視点での議題をもって、取り組んでほしいというようなことをメッセージとして出していけるといいかなというふうに思ったところです。以上です。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○井戸川専門委員

井戸川と申します。

立場としては専門的な関係と言うよりも、宮崎県の結婚サポートセンターの中でお見合いをして結婚をしたという立場で、今日は少し自分の話になりますが、お話しさせていただきたいと思います。私もお見合いで結婚したのですが、当時コロナ禍というのもあって、なかなか婚活が難しい状況でありまして、1対1のお見合いを設定していただいて、成婚につながったということで、私としてはありがたいなと思っています。今は結婚もして子どもも生まれまして、子育てする立場に立っておりますので、今はどのような婚活が行われているかというのは分からないですが、補助制度等も、中には条件が外れていて対象にならなかったりして、妻が言うにはなぜ私達だけ対象にならないのだろうというような話も色々していたところです。

私も妻も共働きで子育てをしているのですが、二人ともシフト制の仕事でなかなか一般的な仕事をしている人達に比べると、少し苦勞しているのかなと思います。本当に先ほどお話しされておりましたが、非常に余裕が無い。一応食えることができているなと思っています。今は給料もだいぶ増えてきてはいるのですが、私の会社もちょうど繁忙期にあたったもので、育休も取れず、なかなか後から取るのも難しい。人手不足というのは、どうしても影響が大きいのかなと思っています。

います。これで、第2子を考えるというのは、なかなか難しいなと妻とよく話をしているところで、本音としては欲しいのですけれども、経済的にも時間的にもなかなか難しいなと考えています。そういった点でも、支援していただくと非常に助かると思うのですけれど、どのような支援と言われたら、会社によって事情が変わってくると思うので、具体的にこうしてほしいというものがあるわけではないのですけれど。

私の妻は保育士をやっております、そこでも本当に人手不足で、先生が足りないとか、色んな話を聞いています。シフトも朝早かったり遅くまで仕事していたりで、どこの職場でもそうでしょうけれど、人手不足が解決できるのは本当に難しい課題であるとは思っているのですけれど、そういった点で環境を良くしていただきたいと思っております。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○宮本委員

宮本と申します。よろしくお願いいたします。

学校関係での発言をさせていただきます。

前回、前々回の審議会でも言ってきましたけれども、県民アンケートの結果で、中学3年生の将来の夢・希望や高校等の進路というところのパーセンテージがとても低いということが言われていましたけど、大人もそうですが、やはり先ほどから子ども達も認められたいという欲があるわけですね。ですから、色んな人達と出会って、自分の良さを広めていってもらえたらいいのかなと思うのですけれど、やはり自信がなかったり、特に今、中学3年生と関わっているのですけれど、コロナ禍になった時がちょうど小学3、4年生ぐらいの時から6年間ぐらいですけれど。以前の子どもの達の状況からすると、声が小さくなっているとか、意思表示が難しくなっているとか、表現力が乏しくなっている、コミュニケーション能力も随分と低下しているなと思っていて、一人ひとりと面談をさせていただくこともある中で、やはり8月、12月に2回面談をしたのですけれど、その時に高校の希望とか将来の夢を聞いても、半分くらいの子がまだ不明というふうな答えを言っていました。この時期になってもまだ、将来の自分がなりたいものとか夢が描けていないなっていうのを突きつけられてショックでした。学校は学校でずっと指導されていると思います。やはり、色んな方々との出会いや、地域との関わりとかで色んなことをもう少し知ってもらって、見せてもらいたいなと思うのですけれど。

1つ紹介したいのが先ほども出ていましたけど、小さな社会の中で、地域やまちづくりの中で、子ども達を積極的に取り込んでいく。自分達が学校に入るのもそうなのですけれど、地域の中やまちづくり協議会の中の土台に、子ども達、中学生や小学生

に入ってもらって、中学生や子ども達が、この地域で何ができるのか、何を希望しているのか、例えば、交流センターであるとか、そういった所でやりたいものや、してほしいこと等、そういった意見をもらうような企画を考えているというのを最近ある方から伺ったのですが、そういった子どもの声を外に向けて発信していけるような、小さなまちづくりというものがあるといいなと思います。大きく色んな行政からの施策があるとしても、それをやっていくのは地域ですから、そういったところで頑張っている方々がいらっしゃるので、その方々への配慮があるといいなと思います。

それと先ほど言うておりました、コミュニティ・スクールですけれども、以前発足した評議員制度からの脱却もまだできていないのかなという気はします。ただ評価をするだけの会議ではなくて、学校をより良くしていくための会議ですので、色んな立場の方に出ていただいて、しっかり意見を言っていただく、それを受け止めるといいですか、学校側としても管理職の考え方一つで変わっていきますので、そういった管理職に向けての研修等もやっていただきたいなと思います。両方とも変わっていかなければ、将来は見えてこないなというふうに思います。切実な思いです。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○ホアン専門委員

ベトナム人協会理事長のホアン・ティ・ジャンと申します。

外国人としての意見ですが、子どもを母国から宮崎に連れてきたので、子ども達の学校のことについて少し意見というか、実際に私が宮崎に来る前に、子どもと学校のことについて少し話をしました。日本に来るのは4年目になります。ベトナム側ではあまりいじめの言葉も問題になっていない、ある程度少なかったですが、日本に来て自分の子もいじめを受けていたことがあります。学校の友達に無視されて、心細くなっていたので、外国人としても母としてもしっかり子どもと話をし、アドバイスをしました。いじめは日本人でも困っている人が多いですが、外国人は更に困っていると思います。それが一点目です。

また、学校の進路選択について、高校を選択する時に自分で探さないといけない。子どもの学力に合わせて、どこの高校に入れるのかを調べないといけないけれど、日本語ではなく、多言語で詳しい内容が書いてあれば、私達外国人も助かるなと思っています。外国人の子ども達は、教育委員会から2年間ほど、日本語支援がされているけれど、2年経てば支援は無くなります。2年間で同じ子ども達のように勉強するのは難しいと思いますので、そこも支援してもらえたらいいなと思います。

もう一つ子どもから言われたのが、せっかく来たのに宮崎のことをあまり知らないということです。自分も子どもも色々調べたけれど、日本語での説明で調べても分か

らないことが多く、歴史や文化についても分からないので、英語か多言語でもあれば助かると思います。以上です。

○金丸部会長

ありがとうございました。

○山之内専門委員

私は、障害者自立応援センターYAH!DOみやぎきという非営利法人を2002年につくったのですけれども、自立とありますが就労を目指そうとか、リハビリをして機能回復しようとかそういう意味の自立ではなくて、周りから支援されるばかりでは自分は無力というか、自信が無くなります。でも、障がいがある人達がやっぱり自分らしく生きていく上で、自分の人生のリーダーシップをしっかりと掴んでいくということが一番大事なことで、そういうリーダーシップを獲得していくというところでのエンパワーメント、元々その人が持っている力を引き出すような関係性をつくっていくという支援を20年間やってまいりました。恐らく今日委員に選ばれたのも、そういう観点から声を掛けていただいたのかなと思っています。

いっぱい話したいことがあるのですけれども、子ども達の話が出ているところから意見を言わせていただくと、清武せいりゅう支援学校についてです。肢体不自由児の子ども達に4、5年頃前から、最初は授業で一コマ話をするようなところからスタートしたのですけれども、そこから毎年拡大して今では三コマと参観日で授業を行っています。子ども達にどんな話をしているのかというと、例えば、障がいのある人への権利条約で、共生社会をするために国連が定めた条約で、それに伴って十数年間色んな整備がされてきたのですけれども、そのことを子ども達に分かりやすく、寸劇のような形で伝えています。例えばヘルパーさんをつけて、アパートを借りて一人暮らしをしているとか、住んでいてどんなことが必要になるとか、お金の管理や、自分の健康管理であるとか、そういうことを子ども達に伝える授業を一度行いました。今年は高校生が一人暮らししているお家に見学に行って、実際に暮らしている様子を見て、ものすごく盛り上がりました。何が言いたいかというと、学校の中で何を教えるかじゃなくて、誰が教えるかというのはとても大事だなと思って、子ども達にとっては自分達の近い、未来の先輩達がこんなふうに暮らしていて、こういう経験を積みながら生活しているというのを、間近で見るとというのが何よりも学びになっている。その人達から、「あなた達もできるよ」、「自分達の人生を自分達で生きようよ」というメールを送られると、これは学校の中の先生達だけでは無理だと思います。民間や、地域で暮らしている人達が、子ども達を育成していくのに関わりたいと思っている人達はいっぱいいると思います。その人達を上手く学校側が活用してほしいなと思うのですよね。教育委員会も含めて、学校側がもっと地域に開いていく。地域の色んな人材

を、子ども達と接点を生かした地域になるといいなと思いました。以上です。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○鮫島委員

宮崎大学の鮫島と申します。教育委員会の話も出たので、こういう複雑な因子が非常にごちゃごちゃ混ざり合っていて簡単ではないというのは分かるのですが、ちょっと違った視点で二つだけコメントをしようと思います。一点目は、宮崎大学の学生に聞くと、ほとんどの方が自信を持っています。そして、「地域を担うぞ」と言うのですが、その地域は宮崎には限らないというだけであってですね、結局一つの目的を目指して勉強してきた時に大学に入って、一息ついて、自信がみなぎるのかなというふうに思います。決して大学が全てではないですが、大学に入ると皆さん自信を持っているというのを一つの情報として差し上げたいなと思います。決して暗いことばかりではないということです。

もう一つは、教育委員会の件を含めて文科省の方が色々話をしていますが、文科省の方では、今地方の小中高が普通科をたくさんつくって、普通科から東京・大阪・福岡の主に文系に行って、文系がこんなに多くてというような現状は、既に変えますと言っています。理工系に変えたい、文系はこんなに多くありません、なぜならA Iですと、そういうことを言っています。その時に地方の教育委員会は、いつになったら、理工系のこういう流れにしていくのですか。文科省は既に職業学校とかそういうところの重要性を認めています。高等専門学校のすばらしさを認めています。そういうところで15歳から29歳までの間に地域から出て行くことを減らせる方法はいくらでもあるけれども、教育委員会がそういうことを変えてないのですよという話をいつもされます。それを、宮崎県だけ変えることができるかという、できないですよ。できないですが、文科省は動いていますよというのを、この4年間のアクションプランの中に落とし込むのは難しいかもしれないけど、そういう目線を少し入れて、例えば農業をやって稼げますよ、そこに様々な人が入りませんか、そんな昔みたいに土いじりだけではないですよ、農耕が優秀になって工業機械がたくさん入っていて、農業ガールってすごく綺麗な格好して、そういうところで宮崎は農業系ではこういうことをしましょう、畜産系であればこういうことをしましょう、工業学校も高専もすごいですよ、そして、今そこで求められているのは、外国籍の人が欲しい、それから障がい者という言葉が正しいかどうか分かりませんが、その人に個別化できるような工業技術を持っている人をたくさん育成したい。でも来ない。そこで女性教員が欲しいけど、女性教員でそこに行きたいという人も来ない。だからその辺のミスマッチがたくさんあって、そこをどうするかっていうと、2040年を見越すの

であれば、その点はやっぱり考えていく必要があるのかなと思います。少し違った目線ですけれども、情報提供としてお伝えします。

○金丸部会長

ありがとうございます。今のお話は、ハッとした部分があって、既に文科省がその方針転換をしている、各県の教育委員会も準備段階かもしれませんが、ずっと文科省というのはすごく縦の強い世界というふうに感じていたので、もしも文科省が舵を切っているとすれば、恐らく近い将来、宮崎県でも教育委員会はその方向性で模索が始まっていくかもしれないし、見えてくるものがあるのかなと期待をしながらちょっと感じたところでした。

○伊豆元専門委員

実は3つほど、提案じゃないですけど実現できたらいいなというのが、実は私日南市ですけど、産婦人科が二つありますが、一つの産婦人科が辞めると言われました。実は園の隣で昔から知っている方で、年齢も高くなったということで、買わないかと言われて借金をして買いました。何か地域のためになればと思って。最初は分からなかったのですが、産婦人科の思いを引き継いで、産前産後のケアを独自で始めたところ、需要がものすごくあります。お母さんで生まれる前に不安があり、生まれた後、本当にまた苦しい思いをされている方に寄り添うと、そこに助産師の方が来てくださったもので、ものすごく反響が大きくて、ニコニコして帰られます。お昼寝をしても帰られます。身体を休めても帰られます。すごく産前産後ケア、色んなところで取り組まれていると思うのですが、是非民間にも広がっていく、子育て支援施設でも産前産後のケアが広がっていくといいなというのを、国が示しているのですが、なかなか予算の関係上広がりにくいです。需要があるというのは間違いないと思いますので、すごく助かる方が増えてくると思います。

そして高齢者の施設をそこの医療機関で立ち上げました。そこに園の特徴として、園児や児童クラブの子達が高齢者施設へ行って、囲碁が好きな足の悪い方だったので、その方が教えられて、すごく子ども達喜んでいます。そうするとその方は、今度は園の中に来て、児童クラブの中に来て自分が教えたいと行って来られて、身体を動かすようになりました。子どもとの交流が、そこで芽生えてきます。高齢者の活躍する場というのがもっともっとあるのだなと改めて感じました。駄菓子屋もやっているのですが、その販売とかですね。最近はペイペイですけど、みんなそこにいて見守るとかですね。それだけでも全然違うと思いますけど、子どもと触れ合うことによって、そういう活躍の場が増えてくると思います。

もう一つは、熊本の地震、人吉の災害があった時に、私山村振興課と相談したときに、子どものためにだったら木材を避難所とかいつでも出しますっていうふうにつ

ていただいて、本当に嬉しく思いました。そしてコロナ禍の時ですね。田舎の方で裏山があるのですが、そこに各家庭で苗木を植えたいと言ったところ、無償で400本寄贈してくださいました。今その苗木が3メートル、4メートルになって、どんぐりが落ちてですね、虫が来て幼虫が育ったりとかして、子ども達は色んな創作をしたりだとか、絵を描いたりだとか、すごく活動につながっています。宮崎には、地元の良さというのがすごくあると思います。海沿いの園には、水族館も作りました。漁師の方々が、色んな寄贈をしてくださいます。網に引っかかって「これどう」と言って持ってきてくださいます。色んな子どもの施設に、地域の方が色んなものを携わってくると、そこに人のつながりができて、その喜ぶ姿に家庭は喜んでおります。地域も喜んでおります。園の中に先ほど言いました、環境を良くするために木を植えたり、小学校とかももっとベンチがあったりとかテーブルがあったりとか、パラソルがあったりとか、そういうことをすることによって夏場でも木陰ができれば涼しくなります。ずっと冷房のところにいるのではなくて、外に出ることによって色んな楽しみが増えてくると思いますので、宮崎の良さ、外の環境を是非幼児教育又は小学校とかの施設に、木材をどんどん入れ込んで、外でも活動できるような、室内でもいいですけど、そういう環境が増えてくるといいなと感じております。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○川崎委員

先ほど学生の話がありましたが、学生が二極化していくという状況があります。大学卒業後、本当に社会人として、しっかり生活ができるのだろうかという部分で、心配する学生もいますので、そこをどう育てていくかっていうのも非常に高等教育分野でも重要になってきています。そうすると、生まれてから社会人になるまでのステージごとにしっかりサポート体制をつくっていくというのは、とても大事なのかなというふうに思っているところです。やっぱり大学を卒業すると手が離れますので、そこから本当に大丈夫なのかというところが、どこにも行き場がないってところをしっかりと受け皿として、宮崎県の中でやるといいのかなと一つ感じました。

もう一つは先ほど山之内委員が言われた、このテーマは次世代の社会人を育てるといふところですけども、まだまだ色んな、子育てに関しても人づくりに関しても活躍できるというか、活用できる方々がたくさんいるのかなと思っていまして、一つの例としては既に御存じだと思うのですが、この間沖縄県に行った際に、沖縄では子どもの貧困問題が深刻化しているということで、民間の方がばあば保育園というのをやっています、保育士の経験のある方であればばあばが保育園で子育てをすることとか、やはり人手不足の中で里親登録をされている方が結構いらっしゃるんですけど

も、その方の活躍の場が現状宮崎では無いので、里親登録されている方が、子育ての
ところに関わるという形で活躍の機会を作っているという例がありました。そういう
例は他県でもあると思うので、そういう情報を仕入れながら宮崎でできること、そう
いうのも取り入れていくというのも可能性としてはあるのかなと思いましたので御意
見させていただきました。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○加納委員

今日の論点を改めて読み返していて、少し広すぎて答えは出ないなと思いながらお
聞きしていたのですが、色んな話を聞く中で、宮崎は住みやすいとか子育てしや
すいとか言われていますけど、やっぱり優しさがちょっと足りない部分が多いなと思
っています。結局、どんな人でも宮崎に住みやすい、優しい街というか、優しい場所
になるといいなというふうに思ったのですが、例えば、私の会社では、支店の
支配人が車椅子で移動しているのですが、彼が時々宮崎に来ますが、車椅子で移動
するのは難しくないか、段差があって入れないお店があるとか、皆さんが車椅子に乗
って動いてみないと分からないだろうなと思います。新富の駅なんて降りたらどうや
って出てくるのだろうと思うぐらい、階段上らないと行けないような駅で、福岡や東
京に行くと、障がい者や車椅子は全然関係なく、皆さんが簡単に動けるつくりで、完
璧ではないとしても、駅に入った時にスロープがあったり、次の駅の降りた所でまた
スロープが待っていたり、段差が無く非常に進んでいるのに対して、宮崎に帰ってき
た時にはすごく移動がしづらいです。それは言い換えると、結局障がいがある方達が
活動しにくい、本当はもっと活躍できるのにそもそも環境が揃っていないとか、
整備されていないのでその活動や動きを制限してしまう、結局能力を全部発揮するこ
とができない状況を、宮崎県がまだ整えていない、揃えていないので、非常に優しく
ないなというのはいつも感じています。

例えば、ホアンさんのお話を聞きながら思ったのですが、日本語の教育や日本
語学習の話をおっしゃいましたが、そもそももう少し宮崎の人が英語を話せばいい
じゃないですか。英語理解できればいいじゃないですかというのはすごく思いま
す。うちの会社も人手不足なので、宮崎の人間だけで仕事をやっていくわけにはい
かないので、今実はタイの会社と一緒に仕事をしているのですが、うちの会社のス
タッフも英語を喋れないのですが、タイの人は英語で話をするので、英語が分から
ないと仕事にならない。なんでもっと皆英語が、あんなに中学・高校の6年も勉強し
て、大学まで行ってなんで分からないのかというところがすごくあります。これも外
国人に対して優しくない。日本語を喋ればいいじゃないというのはもう通らない。

人手不足で企業としても、やっていくにはどうしても外国の方の力を借りなければできない状況なので、是非そこは力を入れていただきたい。AIがあるからいいじゃないかって絶対だめです。ChatGPTが訳してくれた英語が、間違っているか正しいかを自分でわからないと、AIの英語は使えません。例えば私がタイ語を入れても、タイ語が合っているか分からない。それが理解できるかは、やはり英語力。もう少し宮崎で英語教育をしていただきたいなと思いました。

また、子ども達にとっても、障がい者の方達と同じで移動手段がないと動き回れない。結局お母さんが送り迎えしなきゃいけないじゃないですか。仕事を抜けてでも送り迎えしますからね、お母さん達は。そこでやっぱり仕事の生産性が落ちたりするので、移動手段がないというのも、高齢者の方も運転もできない、子ども達もどこへも行けない。そういう色んなインフラも含めて、色んな所から優しい街というのを変えていかないと、理想ばかりいっていても物事は進まないと思いました。

○金丸部会長

ありがとうございました。その他御意見ある方もおられるでしょうが、もう一つ議題が残っておりますのでそちらの方も聞いていきたいと思えます。

もう一つの議題が、あらゆる人が活躍できる多様性に富んだ社会づくりということについて、議題を進めたいと思えます。御意見があります方、いかがでしょうか。

○山之内専門委員

確かに、共生社会、誰もが口にするようになって、障がい福祉の分野で言うと介護保険制度導入後、介護の社会化というのが言われていて、2003年から障がい福祉も民間が入ってきて、事業者と契約者という方向的にも変わっていきました。特にこの十数年ほど宮崎でも、障害福祉サービスの事業所もでてきて、支援が広がっていきましたが、この間に何が起きたかという、元々法律の目指すところというのは、障がいのある人も無い人も共に暮らしやすい社会づくりをしていこうというのが理念だったのですけれども、逆にサービスが充実してくることによって、例えば障がいのある人と無い人の住み分けが進んでいった。福祉サービスを使って職場とか色んな活動とか、色んな所に出やすいようになって、そこで障がいの無い人との接点できて、そこから共生社会を思い描いたところがですね、障がいがある人だけが職場や学校にいつも関わっている状況ですかね。支援学校なんかでも卒業後、進路でも障がいの重い軽いとか種別によって、大体行く先が決まっている。その子達が何をしたいのか、どう生きたいのかっていうところが、聞くのだけれども重要視されないという、それは恐らく障がいがない子達でも同じような状況があるのかなと思います。本当に障がいがある人と一緒に社会をつくっていくという本気度が試されていて、多くの方がそこまで必要性を感じていない。宮崎の法定雇用率が、全国平均より高いという数値が出

ていますが、それに対してマイナスな事ではないのですけれど、その中身を実際に調べてみると本当にそこで働いている人達がどれくらい満足しているのか。聞くところによると、法定雇用率を守るために、その障がい者の雇用が実際は外部で、形的にはその企業に属しているけれども、企業とは全く関係のない仕事をしているというような、そういう事業者もいるわけですね。そこで働いている障がい者は別に給料が出るからいいっていう、誰も損してないからいいじゃないかという。そこも含めて考えていかないと、こういう計画なんかも絵に描いた餅、理想ばかり書いて終わってしまうということになってしまうのかなと思いました。

○金丸部会長

ありがとうございました。

○二見委員

頭の中でまとまっていないのですけれど、先ほどの鮫島学長のお話も伺って、娘が昨年、高校3年生で、受験を経験したのですが、まだまだ高校は国公立を目指せと、宮崎だけじゃなく是非県外もということで、ここの会議に出て聞く話と現場の話の違いというのをすごく感じたところではあります。先ほどの話を聞いていると、文科省はそうじゃないのだということを知って、まだまだ下りてきてない情報が多いっていうことを、私達せつかく委員としてここに参加しているのであれば、それをもっと私達が自分の所属している団体や知る人達に伝えていって、なかなか国や行政だけでは変えられないものを一県民、一市民として何ができるのかなというのを考えていくということも大事だなと思いました。ホアン委員のお話も聞いていて、外国籍の方も多くなっているなっていうことを知るとPTAとしても保護者に向けての情報も、加納委員の話にもあったように英語がもっとできるようになって、広報を多言語化する。広報紙とかもPTAが作っているけれど、日本語でしか作っていない。結局ホームページにしても、日本語でしか作っていない。だったら外国籍の保護者に伝える方法が足りていないのだという視点を今日学ばせていただいたので、これは自分の団体に持ち帰って、色んな人達が関わっているのだっていうことを、一県民としてやる。それぞれが意識を上げることが大事だというふうに感じました。

あと、メディアを見ていて、他県の取組でモーニングっていう、喫茶店でコーヒー代だけでパンとか味噌汁が出てくるみたいな文化がある地域が、なるべくその高齢者の方からお1人でお住まいの方って、なかなか家から出られないとか、栄養が偏ってしまうとかで、健康寿命の話もあったかと思うのですが、やはり健康寿命を延ばすために、お家から化粧して出て行って人と会って、栄養も取り、人と会話をしてお家に帰る。そこに県が何か補助を出すみたいな取組や、行政サービスも喫茶店に出向いていく、行政に人を連れてくるのではなくて、喫茶店に行政サービスが出向いていき、

そのモーニングを食べている人達にその情報を伝えるとか、健康チェックを行うみたいなのを見て、そういう取組もいいなあと思いました。もう今後は、行政だけで何かというのではなくて、いかに今の、県民のニーズがどこにあるのか、どこに出かけて行っているのか、そういう調査を行って、人口減少は行政の人数も減っていくわけですから、トータルでどうしたら県民が豊かに生きていけるのかみたいところ。それこそ伊豆元委員が言うように、産後ケアに力を入れると、虐待防止や第2子出産につながるというのも出ていますから、リソースをつなげていく。また、高齢者と子どもをつなげていくみたいに、もう本当に視点をもっと広く見ながら、人づくりっていうのを考えていかないといけないかなと、今日の皆様の意見を聞きながら思ったところでした。以上です。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○伊豆元専門委員

2点です。インクルーシブの考え方、保育のことですけれど、発達支援の事業所と放課後デイサービスも入れております。なぜ始めたかという、数年前に園児が1人亡くなりました。コロナ禍だったのですけれど、4歳のときに脳症が見つかって、それから入院が長引き、みるみる体が動かなくなってきて、病院に入院していたんですけど、コロナ禍で誰にも会えない状況で、最後に彼女が選んだのは、家に帰りたい、友達に会いたいということでした。そこで園も車椅子で何回か通ってきました。その時の周りの子ども達が普通に接している姿、可哀想とかそういう色んな偏見とかではなくて、1人の人として認めてあげて、子どもの世界はちゃんと1人の人間として、その子どもと話していく。その子が話せなくても、ちょっと指先と目しか動かないのですけれど、それでも今笑ったとか、色んな子どもの中で分かるところがあります。そこから色んな心が通じ合っている、そういうのを学ばせていただきまして、今発達支援で必要な子も、仲間が支えています。仲間が喋ると言葉もどんどん喋れるようになっていたりとか、身体も動かしたりとかですね、色んなつながりや広がりが出てきております。インクルーシブの保育が、色んな世界が広がるというのは今感じております。

もう一点が、外国人の方が地域が増えてくると、子育て環境が大切かなというのを本当に感じています。その子がほとんど喋れない状態で、園に来る。そこで悩んで、移住してきた本当に良かったのかな、家庭が苦しいとか、そういうような状況も生まれてくるのではないかなと思います。その中に、本当に子どもはですね、遊びの中では言葉は関係なくて、色んなものを作って、遊びの中では言葉以上に心が通じてきます。そうすると自然と言葉が喋れるようになってきて、心が通じてきます。こういう

ところで人と人がつながる。そして外国人の方も、安心して子どもが笑顔で帰ってくると、ここに移住してきてよかったと、子どもが喜んでいるのだったら、頑張って働こうと、そういうふうにつながるのではないかなと思っています。その中で、絵を使う、イラストを使ってのコミュニケーションがすごく助かっております。最初は、通じ合うのが難しいけれど、今何をしたいというのは、絵を使って表します。保育者がそのカードを持っていて、トイレに行きたいとか、話をしたい、悲しいとかそういうのを、絵を使っていくことによって、コミュニケーションが広がっていく。ここが最初の言葉の壁のところですごく有効かなと感じております。勉強させてもらうことによって、本当につながっておりますので、子育て環境を充実していくのも外国人の方にもとても必要なと感じました。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○ホアン専門委員

外国人に対する偏見や差別がまだ無くなっていないことについて、なぜ偏見があるのか、外国人の立場として、お互いが文化を理解していないので偏見になってしまう気がして、どうやって解決したらいいか、経験として言えることは、日本人と外国人との交流会を開いて、文化を共有して交流できるとお互いを理解できると思います。それから、日本人から外国人への偏見だけではなく、外国人の中では日本人は厳しすぎる、冷たいという話がでています。祭りやイベントに参加する時に、是非外国人も参加できるといいなと思っています。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○加納委員

偏見のことについて話をしようと思っていたのですが、今私達の場合は、タイで半分作ったものを日本に持ってきて、仕上げてお客様に渡すということをやっているのですが、タイで作ると言った途端に、タイで作るイコール品質が悪いとか、タイで作るイコール職場環境が悪いとか、これはなぜだろうと思ったのですが、言うとお仕事は決まらなくて、言わないと決まったりするので、日本人は、特にアジアの国の皆様に対する偏見というか差別というか、なんとなく自分達の方が上、上から目線のような、日本が一番で他の国は日本に比べて劣っているみたいな考えを持っている日本人が多くて、そういう声をたくさん聞くので、すごく恥ずかしい思いをしているのですが、実際そんなことはなくて、すごく高い技術を持つ

ている人達もいたりして、そういう方達と仕事をしているのに、どうしたらそれをお客様に伝えられるのだろうかとずっと考えていたのですけれど、それはもしかすると教育現場で小さい頃から外国人の方との交流をしたり、例えば容姿は違ってもどっちが上とかどっちが下とかないのだよというところを、小さい時から教えていただきたいなと思います。そういう意味で、私が日本人として恥ずかしいと思ったケースがすごく多いので、今後、宮崎に外国の方が増えてくると思うので、外国人だからいじめるとか、日本人として恥ずかしいんだよということを是非、伝えていただけたらなと思います。

○金丸部会長

ありがとうございました。

○木場専門委員

先ほど、私からは、高齢者の地域向けのサービスを中心に、地域づくりを進めていってはどうかと主に発言させていただいたところなのですが、もう一つ思っているのが、健康寿命が伸びてきているという資料があったかと思うのですが、肌感で感じるもので、一昔前に比べると要介護認定の年齢層が相対的に上がってきていて、平均寿命以上の90歳以上の方が初めて要介護認定を受けて、サービスを使い始めるというケースが増えてきていると感じます。できるだけ、先ほど自立という言葉も出てきておりましたけれど、そもそも重要だなと思っていて、介護予防や自立支援を推進していくということを、構図として示していくのも重要ではないかと思います。一回サービスを使い始めてしまうと、どうしてもサービスを使うコミュニティの中に入ってしまうと、孤立してしまうというのを感じていて、一回サービスを使い始めて高齢者施設に入りました、後は高齢者施設の中、入居した部屋で人生が終わってしまうみたいなことになりかねない状況があるのかなと思っています。そういった意味では、我々事業者側の中に、介護予防や自立支援を促していくという意識自体を、もう少しインプットしないといけないのかなと思います。サービスを使い始めたら使えばなしであるという視点からの脱却をしながら、本人ができることを促しながら、地域との関わりをどのようにもってもらえるのかという視点を、我々側が持っていなければいけないなというふうに思ったところです。そういった意味でいくと、介護予防の推進をしていくという部分、意識の部分、サービス提供する従事者側に研修の機会も含めてより情報発信をしていくということが必要ではないかなと思ったところです。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○川崎委員

偏見と差別ということは長年言い続けられてきていて、未だに無くならないという現実をどう考えるかだと思うのですけれども、これはどこで生まれているのかと考えた時に、やはり親や周りの人達が何か一言発した言葉が根付いてしまって払拭できない状況で大きくなっているというところはあるのかなと思います。それに根拠は無いのですけれども、今、多様性の尊重というキーワードがかなり浸透してきていて、先ほど、山之内委員が言われたように形はできていても、実質浸透していないというところで、県民の意識をどう変えることができるかというのが非常に混合的な問題なのかなと思います。先ほど、ホアンさんが言われたように、人を知らないからこそ自分の勝手な価値観で判断をしてしまうというところもあると思うので、やはり人を知る機会だったり、知り合う機会や交流する機会だったり、そういうものを多くもつというのも必要と思います。今でもかなり増えてきていると思うのですけれども、参加しようとする側が、生活スタイルの中で、画一的に朝起きて子どもを送って、お仕事から帰ってきてというその生活スタイルの余裕の無さ、生活の質を高める時間がどれだけとれるかというのも大事になってくるのかなと思います。そういうのを宮崎県では、皆でこういうことをやっていきましょうという感じで、地域への活動や参加を勧めていくようなものもあっていいのかなと思ったところです。

○金丸部会長

ありがとうございました。

○宮本委員

大きく2つです。先ほど英語の話がありましたので発言しますと、教科書が変わると単語の数も変わり、指導内容も変わってしまっているのが学校は大変だと思います。やはり受験体制が変わらないと厳しいのかなと思います。家庭環境もありますけれど、塾に行ける子、行けない子の格差は広がっていると思います。問1、問2に対して、子ども達が何十人もいますので、できれば支援する人を増やす等、体制の整備も必要だと思います。

あらゆる方々がお互いに尊重し合うというのが論点にありましたけれども、これは人権の問題だと思います。宮崎県は意識調査で、人権は尊重されているかの割合が低かったです。山之内さんも言われましたが、障害者差別解消法が施行されて、雇用は法的配慮をするようになっているのですけれども、色んな企業や施設等、まだまだだなど思っているところです。そういった時にその当事者達が声を上げて、こうしたいというのを発信できて、その企業側がそれを受け入れてくれるまで浸透するにはまだまだかかるのではと思います。

人権擁護委員もしているのですがその立場で申し上げますと、保育所、保育園、児童クラブ、小中高校、特別支援学校とかで人権教室というのを、命を大切に、思いやりなどについてお伝えする活動をしているのですが、最近多いのは高齢者施設の方、介護施設職員の方向け、企業の方々からも人権に対する研修をしないと要請が増えています。特別支援学校であれば、高校生や中学生の人達に対応する職員の向き合い方の研修をしたいとか、高齢者施設の方々に対しては、高齢者の方々の特性とか自分の将来の姿など、色々な方への研修が増えてきました。以前は施設に入らせてもらおうと、自分達の内情を知られるのではないかとか、そういったところで拒絶されたこともあったのですが、意識が変わってきたなと思いますので、それが広がっていったらいいなと思っています。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○井戸川専門委員

難しいテーマだなと思いながら話を聞いております。その中で思ったのが、差別や偏見というところなのですが、外国人の方達との接点がほとんど無くてテレビ等で見ただけの情報しかない、分からないというのが正直な気持ちで、分からないから少し怖いイメージを持ってしまうというのもあると思うのですが、やはり交流も必要だなと思うのですが、そういった機会が実際に全く無いので、これからそういった機会をどうしたら増やしていけるのかなと思いました。外国人の方と接することはあるのですが、話も上手くできるのか不安に思ったりすることもありますし、関わっていない方達ももしかしたら不安な気持ちで差別や偏見につながってしまうのではないかと思います。交流や相互理解は大切だと思います。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○鮫島委員

あえて言いますが、偏見や差別は絶対無くならない。なので、これがインクルーシブの邪魔にならないように抑えてくださいというレベルなのかなと思います。アメリカに行っても差別はあるし、スウェーデンに行っても差別はあるし、色々な所があるので、それを差別と思えないレベル、あるいは自分も思わないようにするということが重要なのかなと思う気がします。それから、例えば障がい者の方の車椅子が宮崎で非常に動きにくい、障害がたくさんある、これはプライオリティをここにすればこっちができなくなるんですよと、それをいいですねという皆さんの認識がある

というところから始まるのですけれど、実際は宮崎大学の中にも様々な障がい者学生が暮らしておりますが、それをすることによってもっとメリットがあつて、トレードオフではないですよというふうになっていく。その経過もそんな簡単に、1日2日ではない。東京のように自分がたくさんお金を持っていて、がんがんやることができ自然に上がっていくことができるということではなくて、貧しい県の中でどのようにお金を分配していくかというところで、将来のプライオリティを上げていくということが、例えば道に関しては高齢者にも子どもにも、そういうところの良さをどうにかできないかとか。あるいはバスのような公共の乗り物が少ないのであれば、それはプライベートの会社だけでやりますか、お金が無いけれど市や県が公共のものを出しますかというディスカッションですよ。それを本当に皆が、自分事としてお金を払う立場の人間の心に落とし込めるかどうかということなので、これもしないといけないと思いますが、さあどうしますかというのは簡単には出てこないでしょうね。首長の方がこういうのをやってみるといっているので、すばらしくなるのはあり得るかなと思います。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○加納委員

県や国のレベルで動くというよりは、私達からできることはたくさんあつて、例えばお店の前の段差にスロープを置いておけば、中で食事ができるだとか、バスに乗るときに、周りの方が少し手を貸せば乗せてあげられるような、そういうケースがすごく多くて、障がい者の方達をもっと動きやすくするために私達は何ができるかということを考えていという思いで発言しました。駅のエレベータを、障がい者の方がいるのに別に荷物も持っていない若い子達が使うとか、トイレの前で待っていても障がい者用のトイレがあかないとかですね。歩きスマホをしている人達がぶつかってきて怪我をすとかですね。そういう個人レベルで、もう少し障がい者の方達のことを理解できる優しさというのが欲しいなという思いで申し上げたところでした。

○金丸部会長

ありがとうございます。

○山之内専門委員

僕は障がい者当事者で、障がい者の分野でいろいろやってきているから、その発信なのですけれど、20年間やってきて思うことがこの障がい者当事者で障がい者分野を発信していても変わらないだろうな、限界があるのだろうとすごく思っていて、そ

これは障がい者の問題だけで片付けられてしまうので、結局は制度の充実を訴えてきたのだけれども、住み分けに拍車がかかり、障がい者運動を訴えてきた側からも声が上がってきております。今日はここに多様な方達のメンバーがいて、これから障がい者団体を障がい者分野だけではなくて、色んな分野で例えば外国人の問題や、そういう人達とつながりながら若い人達とも色々な課題問題があるのかという話をして、同時に障がい者を分かってもらう。どうやったらこの地域が良くなるのかというのを考えていくというのは、積み重ねていかないと社会というのは変わっていかないだろうなと思っています。多様な方達が集って問題を相互に認識し合える、その中で私達ができることは何かというのを具体的に考えていく。障がいがある人は、頼るばかりで頼られることがなかったり、支援者に依存してしまうということがあるので、頼ったり頼られるということを関係性の中で構築していく。それが障がい者分野だけではない人達とつながりを作っていく、小さいモデルケースを地域の中に作って、そこにどう行政が関わり支援し、それをどう広報していくのかというところが具体的な取組かと思えます。

○金丸部会長

ありがとうございます。まだ御意見があるとは思いますが、改めて様々な御意見をいただきながら考えをお聞きしたのですが、やはり誰もがその地域で豊かに暮らしていくための社会づくりということで、今日色々な御意見を議案に沿って、具体的に意見交換ができたのではないかと思います。まさに今の話にも通じる、地域包括ケアという概念が今推進されていますけれど、これはベースが地域ということで、医療のお話をしますと今地域医療構想が進んでいまして、医療提供体制という視点で動いているものですが、新しい構想は市町村、介護が入ってくる。地域医療構想から地域医療介護構想と呼ばれるくらい生活の中に入っていくって、コミュニティの中に入ることによって協働参画して、これから皆でどうやってできるかというところの施策も動いているので、まさに今日いただいた御意見が県の方で課題として進められて、地域で実際に動くためにどうするのか、それが広がっていく、そして意識が変わることにつながっていくのも1つの方法であるのかなと改めて感じたところでした。

限られた時間でまだまだ御意見があるかと思いますが、予定時間が近づいてきました。改めて全体として御意見がございましたらいかがでしょうか。

○木場専門委員

23 ページに愛媛県の宇和島市の事例がでておりますが、私、先ほど地域づくりを地域の運営推進会議で落とし込むのはどうかと発言したのですが、継続性やもう一つの視点として、主体、誰がそこを担っていくのか。この観点がすごく難しいなというところで、地域づくりをしてくださいというのを地域型サービス等に投げたとしても、

どうすればいいか、何からしたらいいのか、理想は言えても具体的な所は難しいと思うところで、先ほどありましたが法人内のグループの中で児童部門と高齢者部門をつなぐというすばらしい体制だなと思ったところです。法人内である程度完結できるところに関しては補うことができると思うのですが、小規模型の事業所が点在している地区だった時に、そのコーディネートを誰が担っていくのかというのがすごく難しいなと思ったところで、愛媛県の取組を見てみると、継続性というところで担当職員が異動せず約10年担当と書いてあります。担当職員を動かさなかったことによってその方が業務を蓄積し、こういったことを成し得ることができたというところだと思います。そういった意味で考えると、誰が地域づくりを担っていくのか、地域づくりを担う人を育てるといったところが必要になってくるのではないかと思ったところです。

○金丸部会長

ありがとうございます。ほかに追加の御発言はなかったでしょうか。

今の点に関しては、異動があっても、つながって上手く持続ができるような、1つの一番近い場所としてやっていけるような、協議ができる具体的な広がり、どこから入ってもいいでしょうけれど、異動があっても継続できる、組織としてできると1つの方法としていいなと思いました。

ほかに御意見は無かったですでしょうか。予定の時刻にもなりましたので、本日の審議は終了ということによろしいでしょうか。皆様にたくさんの御意見をいただきまして、本当にありがとうございました。本日の審議を終了させていただきます。

いただいた御意見や他の部会の意見などを総合的に整理しながら、今後、長期ビジョンの改定に向けた素案づくりを行っていくこととなります。

皆様におかれましては、お忙しい中、会議が続くこととなりますが、より良い長期ビジョンへと改定するため、御理解、御協力をお願いします。

それでは、進行を事務局へお返しします。

○事務局

皆様、熱心な議論をどうもありがとうございました。最後に総合政策課長から一言御挨拶させていただきます。

○総合政策課長

2時間にわたって大変熱心な御意見を頂戴しまして、本当にありがとうございました。私どもは今、総合計画の改定ということで、様々な作業を進める中で、最初の会議の中で説明させていただいたところですが、県や各地に出向いて色んな御意見を頂戴しているところであります。本日は本当にそれぞれのお立場で、生の声や御意見をいただき貴重な機会でありがたいなと思っております。一つ一つしっかり受け

止めまして、2040年の宮崎県の姿を展望しております総合計画において、人づくりに関しては、一人一人が生き生きと活躍できる社会というのを目指す将来像に掲げております。本日の論点はまさにそういうところだと思います。これから人口がどんどん減っていく中で、一人一人の重要性というのはますます増していきますし、AIが発達していきますので、なんでも情報やものが手に入る時代です。だからこそ、一人一人がしっかり顔を突き合わせて、顔の見える関係を築いていくということが、これからますます大事になっていくのだろうなということを、皆様のお話を聞きながら改めて感じたところでございました。本日は、各部局から担当者が参加しております。皆様の貴重な御意見を各部局担当者もしっかり聞かせていただいておりますので、計画改定や様々な課題解決に向けた施策の立案の参考にさせていただきたいと思っております。本当にありがとうございました。

○事務局

今後に関する事務的な連絡事項をお伝えします。

次回の専門部会につきましては、来年3月下旬頃を予定させていただいております。また、部会長からも説明がありましたとおり、次回の審議会につきましては長期ビジョン改定の素案を示させていただくことを予定しております。

以上をもちまして、閉会とさせていただきます。

本日は、ありがとうございました。